

陸上部の黒い噂

yami_yami

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四葉が駅伝の助つ人を頼まれた陸上の部長は黒い噂が絶えません。完全に部長にマークされてしまつた四葉がどんなことをされるのでしょうか？

超絶快感媚薬マッサージ

① 目

次

超絶快感媚薬マツサージ ①

四葉「はあはあ…」

部長「みんなお疲れー、今日はもう練習終わりだからしつかり家で休んでね」

四葉「やつとおわつたあ… 家に帰つて勉強しないと…」
期末試験まで後4日、私はいま人生最大のピンチに直面しています。

陸上部の駅伝の助つ人をお願いされて請け負つたのはいいものの、毎日夕方まで練習をしているせいで勉強時間があまり確保できません。

このままじや上杉さんに顔向けてできませんよ…

ですが陸上部のみなさんも頑張つてるのでここで抜け出すわけにはいきません！

四葉「あ、上杉さんからメール… 今日のこと謝らなきや…」

部長「あ、中野さん！あとでユニフォーム渡したいから体育館倉庫まで来てくれるかな？」

四葉「あ、はい！わかりました！」

部長にそう言われたので急いで着替えて体育館倉庫まで向かいました。

もう日も落ちて薄暗くなつて来ていました。

他の部員のみなさんも帰つてしまつて、あたりはものすごく静かです。

四葉「あれ、部長確かにここに来てつて言つてたはずなんだけどな…」

体育館倉庫に行つてみると電気はついておらず誰もいませんでした。

するといきなり電気がついて奥の方から部長さんが現れました。

部長「あ、中野さん、来てくれたんだ」

四葉「はいっ、あのユニフォームつて…」

ユニフォームを貰おうとする部長はなぜか倉庫の入り口の鍵を

閉めてしましました。

四葉「あの… ユニフォームは…」

部長「ユニフォームもわたすけど、ちょっと中野さんには今から付
き合つてもらうね？」

部長はそう言つてニコつと笑い、私を奥の方へつれていきました。
奥の方へ着くと、そこには寝台のようなものが置いてありました。

部長「中野さん、ちょっとここに仰向けになつてもらえるかな？」

四葉「え、何するんですか…？」

部長「中野さん最近頑張つて疲れてると思うから、マッサージして
あげるよ」

そう言われたので、人の善を受けないわけにはいかないと寝台に仰
向けになりました。

制服を脱いで下着姿になると、部長は何か鎖のようなものを持って
来ました。

四葉「え？あの、これは…」

部長は寝台に取り付けられた金具に手錠のようなものをつけて私の
手と足を拘束しました。

部長「ちょっと気持ちよくなつてもらうだけだからね？」

そう言うと部長はローションのようなものを取り出しました。

本格的なマッサージなんだなと思つていましたが、どんどん部長の
息遣いは荒くなつていきました。

部長「中野さん、ちょっと失礼するね」

そう言つて部長は私の股の方へと顔を近づけました。
縛られているせいで足は閉じれません。

部長は下着に鼻を当てて勢いよく匂いを嗅いで来ました。

四葉「え?! やめてくださいっ！」

部長「はあ… 前々から中野さんのここ、匂い嗅ぎたかつたんだよ
ねえ〜」

四葉「いやつ！ ちょっと！」

部長「今日あんなに走ったもんね… すつごい匂いきついけど最高

丶

何が起こっているのかあまり理解できていませんでした。

女の子同士なのに？と頭の中ははてなマークで埋め尽くされてしましました。

部長「中野さん、今日は私といっぱい気持ちよくなろうね…」

部長の目はもう正気ではありませんでした。

部長は私の下着の両端をハサミで切つて脱がせました。

そしてちようどお股の当たる部分の匂いを集中的に嗅ぎながら自分のお股を触っていました。

四葉「私はやく帰らないといけないんです… やめてください…」

部長「何言つてるの？これはご褒美なんだから、中野さんも1時間後にはきっと戻れなくなつてるよ」

そう言いながら部長は私の下着の汚れた部分を見せ、「…すゞい匂いする」と言いながら見せるように匂いを嗅いで来ます。

四葉「そ、そんなとこ嗅がないでください…」

部長「中野さんも嗅いでみる？」

四葉「いやっ…」

部長「すつごい匂い濃いよ、これ貰つてくれ」

そう言つて部長は私の下着をカバンに入れました。

そして今度はローションを取り、私のお腹の方へと垂らしてきました。

四葉「やつ… やめてください！」

部長「安心して… 1人でする時よりも数倍気持ちいいから…」

ローションを私の体に塗りたくり、今度は胸を直接いじつて来ました。

嫌なはずなのに匂いを嗅がれてこんなことをされて体は興奮しているのか、乳首はどんどん硬くなっています。

部長はいやらしい手つきで私の乳首をいじつて来ます。

四葉「やつ… あんつ… やめて…」

部長「中野さん？こんなにコリコリだけど… 体は正直なようだね」

どんどん強く触るようになつて来て、少し強くつままれたり、引っ

張られたりしました。

四葉「あつ！… やめてつ…」

部長「あはは、そろそろ効いてきたかな？」

そういう言うと部長はローションのラベルを私に見せてきました。
何やら文字が書いてあり、乳首への刺激でよく読み取れませんでした。

た。

部長「実はね、これ強力な媚薬入りローションなの」

四葉「媚薬… そんなのいやつ…」

部長「ああ、もう下はこんなに溢れ出てきてる」

そう言つてローションでヌルヌルになつた手で私の足の付け根辺りを触り始めました。

まだ直接触られていないのに、媚薬が効いているのか強い刺激を感じました。

四葉「やんつ… 触らないでえ…」

部長「やーん、もんこんな音なつちやつてる」

くちゅくちゅと音を鳴らしながら私のびらびらを触り始めました。

媚薬でかなり敏感になつていて、もう何も考えられなくなつっていました。

部長「中野さん、ここおつきくなつてるけど、今触つたらどうなるかな？」

そう言つて部長は私の大きくなつたクリトリスに息を吹きかけました。

息を吹きかけられるだけでもかなりの刺激を感じて全身に電流が走るような快感が訪れました。

四葉「んつ… つ！」

部長「中野さんいき吹きかけただけでビクビクしそぎだよ」

そしてとうとう部長はクリトリスを指の腹で転がすようにこすつてきました。

四葉「んあつ!!! ♡♡♡」

あまりの刺激にもう頭の中は快感のことしか考えられなくなつていきました。

あれで、出でてくる愛液が飛び散るくらい激しく、部長は私のクリをいじります。

部長「中野さんすゞ～いつ…こんなに吹き出してきてる…」

四葉「んはあくろきもちいつ♡♡」

もう私は完全に快感に身を任せていきました。

完全に堕ちてしまい、部長にされるがままとなつてしましました。

四葉「もうイクつ♡イクイクイクイクイクイクつ！♡」

部長「いいよつ！いっぱい出して！」

四葉「イクつつつ…♡♡♡♡♡」

イク瞬間、今まで自分でしてきた中でも感じたことのないものすごい快感が身体中を走りました。頭の中はもうそれしか考えられないくらい気持ちよくて、自然と腰が浮き上がつてしましました。

お股にも力が入らなくなり、奥の方からくるものを抑制することができず勢いよく外に放出してしました。

部長「わっ、すごい潮吹きつ！」

部長は私がイッているのにも関わらず指を止めてくれません。

絶頂に達して最高に敏感になつている私のおまんこは部長の指のさらなる刺激によつてもうコントロールが不能になつてしましました。

何時も我慢した時のおしつこのように吹き出してしまつた私の潮は、体育館倉庫の床に大きな水たまりを作つてしましました。

部長「中野さん…やつぱりあなたは天才だよ…こんなに潮を吹けるなんて…」

四葉「はひつ♡もつとしてくださいつ♡♡」

部長は指での攻めを辞めた後、私のおまんこに顔を近づけ、勢いよく愛液を啜りました。

部長「んはあく、おいしい♪」

四葉「やくんつ♡もつと舐めてくださいつ♡」

部長は敏感になつたクリを今度は下で転がすようにクリクリと舐め始めました。

四葉「んあつ!!!」

さつきとは違う刺激に腰が浮き上がり、勝手に声が出てしまいます。

部長はレロレロと私のおまんこを舐め回すように味わい、膣口の方に舌を入れ始めました。

四葉「え?! 舌が入つてきますっ！」

部長「これ気持ちいでしょ?」

四葉「はいっ もつとしてほしいっ！」

部長は自慢の長い舌を私の膣内に挿入して、中をかき混ぜるように舐めてきます。

四葉「あくくんつ それもつとしてほしいですっ！」

部長「中の味すごい濃いねえ！」

一通り中の味を堪能したあと、またおまんこ全体を舐め回しました。

部長「はあ、だいぶほぐれたかな？」

そういう時部長はカバンからデイルドのようなものを取り出し、奥の方からマシンのようなものを持つてきました。

部長「これピストンマシンつて言つてね、今から中野さんの中をめちゃくちゃにしちゃうよ！」

部長はデイルドをマシンに取り付け、私の股の方へと近づけました。

角度を調節して、一旦スイッチを入れずにデイルドを挿入しました。

四葉「つ〜〜つ！ 」

媚薬で完全におかしくなつてしまつた私は、入れられただけで軽くイッてしまいました。

部長「じゃあまずは30分耐久、言つてみようか？」

四葉「お願ひしますっ！」